

群 教 セ	H 01-02
	平 18.234 集

友達とかかわって楽しく遊ぶ幼児の育成

—一人一人の思いや活動をつなぐ教師の動きと言葉掛けの工夫—

特別研修員 幼児教育 大平 直子 (吉井町立吉井西幼稚園)

《研究の概要》

本研究は、一人一人の幼児の思いや活動をつなぐ教師の動きと言葉掛けの工夫を通して、友達とかかわって楽しく遊ぶ幼児を育成しようとしたものである。具体的には、幼児の発達状況に応じて、安心して自分を出せるようにしたり、幼児同士をつなぐようにしたり、学級全体で活動する時間を充実して過ごせるようにする教師の動きと言葉掛けの工夫によって、幼児の変容を明らかにしたものである。

○ はじめに

幼稚園においては、教師や友達と過ごす楽しさを感じながら、時には、悲しい気持ちや悔しい気持ちを味わい、難しさを感じることも経験し、教師の援助を受けて、幼児同士相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する関心を深めつつ遊ぶ経験を充実させることが求められる。

本学級の進級児は、一年の経験を基に、自分の好きな遊びや安定する場をもち、特定の友達ができ始めている。新入園児は、目新しい遊具や楽しそうに遊ぶ友達の姿に触れ喜んでいる。中には新しい環境に慣れるまで時間がかかり、一人で行動することに不安を示す幼児や、友達と一緒に遊びたい気持ちはあるが、うまくかかわれず戸惑いを示す幼児もいる。進級児にも担任や友達に思いをうまく伝えられない幼児、遊びの意欲が現れにくい幼児がいる。このような幼児たちに教師との信頼関係を基盤に、一人一人が安心して自分のやりたいことに取り組みながら、友達とかかわっていく中で、人とかかわる基盤を培ってほしい。

本学級の実態から、友達とのかかわり方に違いのある一人一人の幼児の状況に、適切に応じる教師の役割を果たすことが必要である。

本研究では、一人一人の思いや活動をつなぐという視点から、教師はどのような役割を果たしたらよいか、教師の動きと言葉掛けを工夫することをポイントにして取り組みたいと考えた。

I 研究の概要

1 基本的な考え方

(1) 友達とかかわって楽しく遊ぶ幼児とは

その幼児らしい表現方法で、自己を発揮しながら様々な感情体験をしている姿である。友達から刺激を受けて、遊びの興味や関心を広げて経験を積んだり、友達と「～したい。」「～しよう。」「そうだね。〇〇もそう思うよ。」と思いや考えを出し合って、その幼児なりに友達と遊ぶことに満足している状態ととらえる。

(2) 思いや活動をつなぐとは

幼児は、自分の思いや考えを言葉以外の表情や態度で表すことが多い。一つ目は、自分でははっきりさせられない幼児の思い（うれしい・悲しい・悔しい・～してほしい・～したい等）をはっきり自覚できるようにすることである。二つめは、その思いを周囲の幼児や教師に表情や言葉で表す欲求を高め、それぞれの幼児が思いを伝えるようし、互いの思いに気付きやすくしていくことである。三つ目は、自分がやりたいと思っている遊びや活動で、他の幼児や友達とつながる楽しさを実感できるようにすることであると考えます。

2 研究の内容及び方法

(1) 研究の内容

一人一人の思いや活動をつなぐために、次の三つの観点から教師の動きと言葉掛けについて実践を進める。

＜安心して自分を出せるようにする指導＞

○ 新しい場所や人の中での不安から泣いたり動き出せなかったりしている状況では、温かく見守られていると感じられるようにする。

- 気持ちが不安定で友達とかかわることに抵抗があったり、自分から仲間入りできなかったりする思いを理解し、自分から発言や行動ができるようにする。

＜幼児同士の関係をつなぐ指導＞

- 新しい遊びや友達を求めて、楽しく遊びたい様子が見られる状況では、友達とかかわって遊べるきっかけをつくるようにする。
- 友達と遊び方や遊具を巡って自分の言動が通らない状況では、自分の思いを言葉に出しているようにする。

＜共に活動する時間を充実して過ごせるようにする指導＞

- 学級みんなで過ごす心地よさを伝え、自分の居場所が感じられるようにする。
- 学級みんなで同じ目的に向かって活動する楽しさを味わえるようにする。

Ⅱ 実践

＜安心して自分を出せるようにする指導＞

事例1 教師や友達と安心して一緒に遊べるようになったB児とH児(5月上旬)

初めての集団生活で、ようやく母親から離れて泣かないで登園できるようになったB児と、泣かなかったが口数や動きの少ないH児。まだ自分から遊び出すことはできない2人は、教師で登園してくる幼児をテラスで迎えることが多い。

幼児と教師の言動	○教師がとらえた幼児の思い *教師の意図
○テラスでB児とH児はC児E児と教師の会話に耳を傾けている。 ○教師は、4人に聞こえるように「天気がいいから外で遊びたいなあ。」と言う。 ○C児「私も行く～。ねえEちゃん。」E児も「行こう。行こう。」と飛び跳ねて喜ぶ。 ○教師「B児ちゃんとH児ちゃんはどうする？」と笑顔で尋ねる。 ○2人ともにっこりうなづき、帽子を被り外に出る準備をする。 ○教師は、B児とH児2人の手をつないで園庭を歩きながら、「みんな楽しそうだな～。どこで遊ぼうかな？」と問い掛ける。 ○2人は黙っている。 ○教師は城の形をしてハンドルや滑り台が付いた固定遊具を指さし「あそこは誰もいないね。」と言う。 ○C子「そうだね。あそこがいいよ。」と駆け出すと他の3人も後を追って駆け出し、教師も後からついていく。 ○短い階段を登って、周りを見回し、C児たちと一緒に「気持ちいいね。」「よく見えるよ。」など感じたことを言葉にする。 ○「あっハンドルがある。」とB児は気付いたことを口にする。 ○教師「ハンドルがあるね。」と繰り返して言う。	○2人ともC児らと教師との様子に関心があるようだ。 *C児らと一緒に行動したら、B児H児に遊ぶ楽しさが伝わるかもしれない。 ○教師やC児らと一緒にいたいようだ。 ○B児H児は何をしたいという思いがまだ確かになっていないようだ。 *使えそうな遊具に気付くように言葉を掛ける。 *感じたこと思ったことを言葉に出して言いやすい雰囲気をつくる。

(2) 研究の方法

①対象

吉井町立吉井西幼稚園 3・2年保育混合4歳児24名

②方法

研究の内容を踏まえて保育実践を行う。保育終了後、日案に一人一人の幼児を記入できる欄に幼児の思いや活動の様子を簡潔に表す。特に、研究にかかわって指導の手がかりとなる場面や幼児の変容が見られた場面においては、その時の状況や幼児の興味・関心、欲求、相手に対しての気付き・教師や友達とのかかわりを含めてエピソードとして蓄積する。教師の意図的な行動や言葉掛けを振り返り、幼児の思いや言動との関連を考察する。

○その様子に反応してH児もしきりにうなずいている。	
○ハンドルの近くにいるB児に向かって、「B児ちゃんに運転してもらってどこかに行きたいな〜。」と言う。	* ハンドルへの関心とB児の動きをつなげるようにする。
○C児「山に行こうよ。」と提案する。	
○教師は「いいね。いいね。」発言を認め、B児H児もうなずいてにつきりしている。	* 教師が楽しくなるような雰囲気をつくるようにする。
○教師は少し大きな声で「さあ、出発だ〜。」と言い体を揺るような仕草をする。	
○幼児も真似る。B児はしっかりハンドルを握り左右に動かす。しばらくして、教師が「そろそろ山に着きましたよ。」言うと同様に滑り台から降りて山に向かっていく。教師も後からついて行く。	○教師やC児らと一緒に安心して遊んでいる。
○元の固定遊具に戻り、教師「次はどこに行こうか。」と聞く。	* 遊びをリードしながら、幼児の思いを引き出したい。
○「花壇のところがいい。」とB児は小さな声で言う。	○楽しい雰囲気の中で、思っていることが言え、教師が認めてくれてうれしい。
○教師「それはいいね。」と言う。	* H児も同じようにやりたいことを認め楽しませたい。
○教師はしっかりハンドルを握るH児に「H児ちゃん、よろしくお願ひします。」とに言って運転を任せる。	
○H児は得意そうな表情を見せハンドルを左右に回す。	

事例2 教師や友達に思いを受け入れられ、友達を身近に感じるようになったA児(6月下旬)

A児はこの4月より入園してきた2年保育児。友達関係ができつつある3年保育児の中で、不安そうに消極的な様子を見せ、まだありのままの自分が出せていない状況である。

幼児と教師の言動	○教師がとらえた幼児の思い * 教師の意図
○A児が家からカタツムリを持ってくる。「先生、何かに入れて。」と言う。	○カタツムリをみんなに見せたい。
○教師はA児の要求に応え空いている容器を渡す。	* A児の思いを受け入れ、みんなに広めたい。
○A児は容器に入れ保育の隅にあった机の上に乗せる。	* 見やすい環境を作りカタツムリに関心を向けさせたい。
○近くの他の幼児が「えっ何があるの。」と関心を示し競うように見る。	
○幼児と一緒に教師は机を広い場所に幼児と一緒に移動して、四方から見えるようにする。霧吹きで容器をぬらす。	○持ってきたカタツムリをみんなが見てくれてうれしい。
○教師はA児が家から持ってきたことを知らせ、どこで見付けたか 質問しながらカタツムリと一緒に見る。	
○A児は肩をすくめてうれしそうな表情を見せる。	
○容器のふたをしていないため、カタツムリが容器から出そうになる。	○カタツムリを持ってきたことで優位な気持ちになり、友達に対する緊張がほぐれて発言が活発である。
○A児「カタツムリが出ちゃうよ。」と周りに聞こえる大きな声で言う。	* より自由に感じて発言しやすいようにしたい。
○周りの幼児も「本当だね。」「大丈夫だよ。」などと口々に言う。	
○A児「ふたをしておけばいいんだよ。」と提案する。	
○周りの幼児もA児の提案に「そうだよね。」と認める発言をする。	
○教師も一緒に目の高さになりながら、「本当だね。」「ふたがあればね。」など自分の思いを伝えたり幼児の言葉を繰り返したりする。	

<考察>

○ B児とH児には園生活の不安があるため、教師と一緒にいたいことが分かる。4月より温かく見守るように努めてきたことが2人の教師に対する信頼となってきたと考える。家庭と違っ

てまだ言葉で自分の思いを出せない2人には、状況に合ったかわりと遊びの楽しさを伝えるように配慮した。具体的には、手をつないで話掛けたり思わず口にした言葉を同じように返すようにした。また、やろうと思っていることや、

やってみたいことを認めたことで、幼児も思いがはっきりしてきたように思われる。固定遊具に誘うことで、程よい高さや、友達と親近感がもてそうな程よい広さで4人と楽しく遊べたと考える。教師の演出やC児、E児の存在により、安心して友達と遊べるようになったと思われる。(事例1)

○ 持ってきたカタツムリをみんなに見せたいと

いうA児の思いに応じて、教師がカタツムリを大切に扱い、幼児が集まってカタツムリを見られるような適当な場をつくった。その中でA児がうれしい気持ちを味わったり、少し優位な気持ちになったりして緊張がほぐれ友達を身近に感じることができ、発言が活発になっていったと思われる。(事例2)

＜幼児同士の関係をつなぐ指導＞

事例3 教師がつくったきっかけで、友達とかかわって遊べたH児(7月中旬)	
H児は、入園当初に比べ表情がにこやかになってきた。いつも一緒に行動するJ児の存在は大きい。J児以外の幼児とのかかわりは少ないが、遊んでいる様子を楽しそうに見ていることが多い。	
幼児と教師の言動	○教師が捉えた幼児の思い *教師の意図
○今日はJ児が欠席し遊戯室や園庭をウロウロするが、教師のところに戻ってくるH児。 ○遊戯室に行く幼児を見ながら、「先生も一緒に遊戯室に行ってみようかな。H児ちゃん、一緒に行ってみない。」と尋ねる。 ○H児「うん。」と頷き、教師と一緒に遊戯室へ行く。 ○H児は遊戯室で遊ぶ幼児たちの様子をうれしそうにしばらく眺める。 ○教師は「オッピー」(一人で自由に乘って移動できるゴム製の空気の入った遊具。)を持ち出してH児の近くで遊んで見せる。 ○周りにいた3・4名も幼児も「オッピー」を始める。 ○H児も「オッピー」を持って遊び始める。 ○教師はH児の側に行き「ジャンケンしよう」と言う。 ○H児はニコニコしながらジャンケンをする。 ○H児「もう一回」「もう一回」と教師に求める。うれしそう。 ○教師は求めに応じて何回もH児とじゃんけんをする。 ○他の幼児も様子に気付き仲間に入る。じゃんけん大会のようになる。 ○H児は自分から他の幼児とじゃんけんができない。 ○H児の近くにG児が来る。教師は2人が向き合ってじゃんけんができるように手を添えてH児の体の向きを変える。自然と手が出て2人でじゃんけんが始まりH児が勝つ。 ○「H児ちゃんの勝ち。H児ちゃん強いなあ。先生もさっき負けちゃったんだよ。」と周りの幼児に聞こえるように言う。 ○他の幼児もH児とじゃんけんをしようと並び交代で行う。 ○H児は満面の笑みでじゃんけんを繰り返す。次第に「じゃんけん、ぽん。」の声が大きくなる。	○J児が欠席でやや気持ちが不安定である。 *H児が自分なりに遊べるといいな。遊びの仲間として誘ってみよう。 ○みんな遊戯室で楽しそうだな。 *以前H児は「オッピー」でうれしそうに遊んでいたことをいかし、教師の姿に刺激を受けて遊んでほしい。 ○先生とやりたい。 *しばらく一対一で相手になり満足させる。 ○賑やかに遊ぶ様子に圧倒される。 *他の幼児とかかわるきっかけとして、H児の体の向きを変えてみる。 *他の幼児がH児の様子に関心をもてるように声を掛ける。 ○色々な相手がいて遊びが面白くなってきた。

事例4 教師のかかわりによって周りの状況に気付けようになったK児(7月中旬)	
K児は3年保育児。友達と遊ぶのは楽しいけれど、時々自分の思いが通らなくて遊びから抜けてしまうことが多い。普段はよく話をするが、まだ自分を中心に考えがちで自分の思いを整理できない場面が多い。	
幼児と教師の言動	○教師がとらえた幼児の思い *教師の意図

○テレビアニメの登場人物になって数人で遊んでいたK児が、廊下にくずくまって泣いている。 ○幼児たちはK児を取り囲んで心配そうに黙って立っている。 ○教師はK児と周りの幼児の動きをしばらく見る。 ○状況が変わらないので「どうしたの。」とK児に声を掛ける。 ○K児「僕がひとりで向こうがいっぱいでずるいよ。」 ○教師は周りにいる幼児に言い分を確かめる。 ○L児「違うよ。N児、M児だけでいっぱいじゃないよ。」と言う。 ○教師「いっぱいじゃなくて、2対1なんだね。」と言葉を繰り返して周りの幼児に確かめる。 ○うなずく周りの幼児たち。 ○教師は「いっぱいかな。」とK児にゆっくり聞く。 ○K児は「2人だけ。」と静かに答える。 ○教師は「そうか。2人だったんだね。向こうが2人じゃ嫌なの。」とK児の気持ちを受け止めながら聞く。 ○K児は教師の目を見て「そう。」とはっきりうなずく。 ○「同じ人数が良かったんだ。」とK児の嫌な気持ちを明らかにする。 ○教師とK児の会話を聞いていたL児が「じゃ、僕が入ってあげるよ。」と言う。	* 幼児同士の解決を望んで様子を見る。 ○向こうがずるいと嫌な気持ちを感じている。 * K児と相手の二人の数の感覚は違うようだ。周りの幼児に確かめてみよう。 * ゆったりした雰囲気の中で状況を整理させたい。正しく理解してほしい。 ○先生は僕の気持ちを分かってくれたと素直になる。 *丁寧なかかわり方が、今後の幼児間でのトラブル解決のモデルになってほしい。
--	---

事例5 それぞれの活動が結びついて、同じ方向で遊ぶようになった幼児たち(9月中旬)

周り幼児に対して関心が薄く、ひとり黙々と作ることを繰り返すO児。面白そうだと思うと関心を示して行動に移すが長続きのしないF児、G児。いつも遠巻きに友達の様子を見ていることが多いH児など様々な様子を見せる幼児たちである。みんなで運動会に向かって活動する時間が増えてきた時期である。

幼児と教師の言動	○教師がとらえた幼児の思い * 教師の意図
○いつものように折り紙でクワガタを作るO児。その姿にF児、G児も「やってみようかな。」と言う。 ○O児は、F児、G児の声に思わず笑顔になる。 ○F児は「O児ちゃんみたいの、先生教えて。」と教師に言う。 ○教師「O児ちゃんは、自分で最後までできるようになったんだよね。先生と一緒にF児G児に教えてあげて。」と頼む。 ○O児はうれしそうに「いいよ。」と答えて、F児に見本を示しながら一緒に作り、自分のクワガタが2個になる。 ○O児は両方の手にクワガタをひとつずつ持って向き合わせ、戦わせる仕草をする。 ○教師は少し大きめの空き箱を3個材料置き場に補充する。 ○G児が箱を見つけて「これいいよ。使えるよ。」と言う。F児は「どうするの。」G児は「E児みたいにここで戦わせよう。クワガタ乗せて。」と言って箱の上を叩き始める。 ○F児「ムシキングみたいだね。」とうれしそう。 ○教師は「面白いこと考えたね。」と遊ぶ様子を認める。 ○O児も、もうひとつの箱を使って、F児たちの近くで同じように始める。しばらくするとO児、G児、F児の三人は交代で遊び出す。 ○教師は遠巻きに遊びを見ていたH児に「H児ちゃん、先生のクワガタ使うかな。」と受け取りやすいように差し出す。H児はスッと手を伸ば	○O児みたいに作ってみたい。 ○同じことをしてくれるうれしさを感じている。 * 自分の力でできるようになったO児のよさを認めるようにする。そのよさを友達が気付くように導く。 * 相撲遊びのようにするかもしれない。友達とかかわって楽しく遊べそうだから、材料を補充しておこう。 ○自分たちで作った物で考えて遊べることを喜んでいる。 * 遊ぶ様子を認め、周りの幼児がその遊びに興味をもてるように声を掛けよう。 * H児はクワガタに興味があるから、誘って友達と遊ぶ

してうれしそうにクワガタを受け取る。 ○タイミングよく、後から仲間に入ってきた I 児が H 児を誘って 2 人で箱を叩き始める。	楽しさを味わわせたい。
--	-------------

<考察>

- 遊戯室で H 児ができる遊びをきっかけに友達とかかわって遊べるように指導した。考え過ぎて行動できない傾向の H 児には、友達とかかわるタイミングがとても重要で、繰り返しこのような機会があり自分から仲間入りできたという実感を得られるようにすることで、更なる変容が望めると思った。(事例 3)
- K 児の思いを引き出し、周りの幼児に状況を確かめたことや、受容的な言葉で K 児を受け止めたことにより、K 児の状況理解を促すことにつながった。一連の教師の丁寧なかかわりが、様子を見ていた L 児の発言を引き出した。教師の姿が、幼児の状況に応じて友達とかかわるモ

デルとなると考える。(事例 4)

- 製作コーナーという同じ場で遊びながらも少しずつ違う目的をもって遊んでいた幼児が、友達と楽しくかかわって遊べた。教師が幼児の遊びの方向を予測して材料を補充し、幼児の発想を認める言葉を掛けたことが、一人一人の活動をつなげ友達と一緒に遊ぶきっかけをつくることになった。遊びを続ける姿から友達と遊ぶ楽しさを味わっていることが分かる。友達とかかわっている場面では、幼児をよく見て一人一人の興味や関心の中で互いに共有できる部分を察知できる感覚をもち合わせることが、幼児一人一人の状況に応じるために重要であると思われる。(事例 5)

<共に活動する時間を充実して過ごせるような指導>

事例 6 学級のみんで過ごす心地良さが味わえるようになった D 児(5月～11月)				
4 月より担任が替わり学級に 6 名の入園児を迎える。昨年より在園していたが人見知りの強い傾向にある D 児は不安そうである。口数が少なく表情も乏しい。仲の良い P 児と行動を共にすることが多い。				
	全体の流	周りの幼児の様子	D 児の様子と D 児に対する教師の援助	
ロ ン ド ン 橋 5 月	教師と一人の幼児が向かい合って両手をつなぎトンネルをつくる。一列に並んだ幼児が順番に通る。歌いながら進み「さあ、どうしましょう。」でつないだ両手を降ろし、一人の幼児を捕まえる。幼児同士は交代する。繰り返す。	○何をするのかなと不安そうな表情を見せる幼児や、うれしそうに体をかがめて通る幼児がいる。 ○教師と一緒に歌を口ずさむ幼児もいる。 ○順番を抜かされそうになり慌てる幼児もいる。 ○遊び方を理解し繰り返し遊ぶことを喜ぶ。	○列の後ろに並んだ D 児は、前を歩く幼児の後をついていくことに躊躇 ^{ちゅうちょ} して、立ち止まる。 ○困った表情で、後ろに並ぶ幼児に押されるように、トンネルを不安そうな表情でくぐり抜ける。	○初めてのことに戸惑っているようなので、「D 児ちゃん、そのまま、こっちに歩けばいいんだよ」と手招きする。 ○言葉で伝えただけでは不安感を除けない。繰り返す中で遊び方や楽しい雰囲気を感じとれるよう明るい声で笑い顔を向ける。
ス タ ー バ ス ケ ット 7 月	星の面を被ってフルーツバスケットの要領で遊ぶことを知らせる。ルールを分かりやすくするために、教師が鬼になる。鬼が言った色の星の面を被っている幼児は、違う椅子に移動する。「スターバスケット」の言葉で全員が移動する。慣れたら椅子に座れなかった幼児が鬼になる。	○ルールの分からない幼児に「赤だよ。動くんだよ」「ここが空いているよ」と助ける言葉を掛ける幼児がいる。 ○次は教師が何色を言うか期待して腰を浮かせて待つ幼児もいる。 ○繰り返すうちに、ルールが分かってくる。「僕、鬼になりたい」という幼児もいる。	○初めての遊び方に、戸惑いを見せながらもルールに従って、自分の面を外して色を確認する。 ○教師の言葉に従って速やかに動くが、近くに移動している。顔は無表情で不安そうである。 ○ルールが分かり教師の言葉に反応して動く。近くの空いた椅子に座	○やり方が理解できるようゆっくり繰り返し、D 児を含め全員が座れるようにする。 ○D 子の様子に合わせ安心感を与えられるように「そうだよ。」「早かったね。」などと声を掛けるようにする。

			って安心している。	
オ オ カ ミ ゲ ム 9 月	ALT授業。講師が日本語を話せないため、ジェスチャーを交えて簡単な英語で自己紹介をする。出身国の旗や家族の写真を見せる。幼児が以前より知っているオオカミゲームをすることになる。明るい雰囲気である。幼児は、オオカミ役のALTが言った数だけ進む。「dinner time」の言葉で、幼児は逃げる。	○繰り返すことで、オオカミゲームのやり方を思い出す。 ○笑顔で遊ぶ幼児が多い。 ○ALTの英語で言った数を「one, two, three・・・」と確かめながら前に進む。大股で進みALTの近くに寄りたい様子も見られる。 ○「キャア～」と奇声をあげうれしそうに逃げる幼児が多い。	○新しいALTの様子に驚いた表情を見せ緊張している。 ○ALTをよく見ているが話は分からない。 ○ゲームが始まり、体は緊張のため硬くなっている。あまり前に進まず、英語も真似ない。 ○いつもより強い力で握り返し、教師と一緒に進む足取りが少し元気になる。	○新しいALTを、幼児に紹介してからD児の近くに座る。 ○D児の様子に、不安が取り除けるように隣に行き、安心できるよう手を握る。 ○手を握ったことで、不安が和らいだようなのでそのまま一緒にゲームを続ける。
み ん な 座 れ る 子 取 り ゲ ム 11 月	椅子を円陣に置くように指示する。音楽に合わせて歩く通常の椅子取りゲームをする。音楽が止まると空いている椅子に座る。椅子を減らさずに繰り返し幼児が遊びを楽しむようにする。幼児の動きに変化をつけさせるため、椅子を減らし始める。座れなかった幼児は友達の膝に座ってよいという新ルールを伝える。全員が座ることを強調する。	○期待しながら、椅子を用意する。 ○慣れた様子で、音楽に合わせて楽しむ。 ○教師から新ルールを聞いて「椅子が減ったよ」「楽しそう」「やってみたい」と言う。 ○音楽が止まり椅子を指して駆け寄ったり膝に座ったりする。 ○「ここにきて」と呼ぶ。うれしそう。 ○J児は「D児ちゃんおいで」と声を掛ける。	○要領が分かっているため、空いているところにスムーズに座る。 ○仲良しのP児の席の隣になり顔を見合わせて喜んでいる。 ○他児の歓声と同時に頬を高揚させている。表情が明るい。 ○J児の声に、はにかむがJ児の膝の上に座る。音楽に合わせて同じことを喜んで繰り返す。	○空いているところに座ることがよく分かっているで見守る。 ○P児の隣で、うれしそうな様子にうなずいて認める。 ○新ルールにも対応できたD児の姿を「それでもいいんだよ。」と認めるようにする。



＜考察＞

○ ゲーム遊びでのD児の様子は、学級全体がまだ落ち着かない5月は、みんなと過ごすことに不安の色が濃かった。11月頃には、学級全体が明るく楽しい雰囲気になってきたためかD児のゲームに取り組む姿が変わってきた。D児とP児の関係も確かなものになってきたので、よりみんなで過ごすことに抵抗感がなくなったと思われる。教師がD児をよく見てその状況に合ったかわり方をするように配慮したことが、D児の不安感を取り除くことにつながった。ひとりの幼児に注目するだけでなく、学級集団を育てていくように併せて指導していくことが大切である。

○ 季節や幼児の発達に合わせて、計画的に幼児が楽しめる新しいゲームを提案し、幼児の実態に応じて取り組み時間や遊び方を工夫したことが、みんなで一緒に過ごす楽しさを味わえることにつながったようだ。また、みんなで経験した遊びを、思い思いに遊ぶ中で自分たちの遊びとして楽しむ姿も見られ、一斉に行った楽しい経験が友達とかかわって遊ぶベースになっていることも分かった。

VI 研究の結果と考察

友達とかかわって楽しく遊ぶ幼児を育成するために、研究の内容を踏まえて保育実践を行ってき

た。幼児の状況に応じた具体的な教師の動きと言葉掛けの工夫として次のようなことを考えた。

<安心して自分を出せるようにする指導として>

温かく見守られていると感じられるようにする場面では

- 笑顔で接したり話をよく聞いたりする。
- 幼児の要求になるべく応じるようにする。
- 直接触れ合ったり肯定的な言葉を多く用いたりする。
- 幼児の居場所づくりや安心して楽しく遊べる雰囲気づくりをする。

幼児の思いを理解し自分から発言や行動できるようにする場面では

- 幼児の表情や動きから思いを推し量り言葉に出して伝える。
- 幼児の思いを理解し自分から発言や行動できるような遊びのきっかけをつくる。
- 思わず口にした言葉を同じように返す。
- やろうと思っていることや、やっていることを言葉や表情・しぐさで認め自信をもたせる。

<幼児同士の関係をつなぐ指導として>

友達と遊べるきっかけをつくるようにする場面では

- 友達とかかわって遊べる場をつくる。
- 友達の遊ぶ姿に興味をもてる具体的な言葉を掛ける。
- 周りにいる幼児に存在を気付かせて誘うように言葉を掛ける。

自分の思いを発揮できるようにする場面では

- 遊びの興味や関心を予想し、適量の遊具や材料を用意する。
- 遊具や遊び方を巡ってのいざこざでは、その時々思いを表す態度や言葉を受け止める。
- はっきりしない自分の思いに気付けるようによく話を聞きながら確かめるようにする。
- 相手の思いを感じられるように意識させる。
- 会話をしながら言葉を補い気持ちの整理を手伝う。

<共に活動する時間を充実して過ごせるようする指導として>

学級で集まった時間に楽しい共通の経験を積み重ねられるようにする場面では

- 一人一人に目を向け、その状況に応じて声を掛けたり手をつないだり、遊びの仲間になって一緒に楽しむようにする。
- 季節や幼児の発達に合わせて、新しいゲーム

を提案し、幼児の実態に応じて取り組み時間や遊び方を工夫する。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 思いや活動をつなぐ意味は、幼児なりに自分の思いをはっきりさせること、周りの幼児にその思いを伝えようという意欲をもち、周りの幼児も、その思いに気付くようになることである。一人一人の思いや発達、その状況を読み取ることができるとタイミングよく思いや活動をつなぐ指導に結び付くことが分かった。
- 記録をまとめ考察してきたことで、幼児の状況の変化が確かに読み取れた。友達とかかわって楽しく遊ぶ過程で、順調に成長しているように見える幼児でも不安になる状況がある。幼児に応じて柔軟性をもって働き掛けることが必要である。
- 教師の言葉掛けが、幼児の思考に働き掛けて、自分の行動を振り返るきっかけになり、状況理解を促すことになることが明らかになった。
- 個々に遊びを楽しむ様子の中に共通になりそのようなことを教師がとらえ、幼児同士をつなぐ援助をしてきたことで、友達とかかわって遊ぶ楽しさが感じられるように成長してきた。

2 今後の課題

- 一人一人の幼児が自分の力を発揮し友達と楽しく遊べるように成長してきた。今後、学級における一人一人の存在が、自他共に認められるように、個々の幼児の様子を全体に広めていくことを増やして、幼児同士相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する関心を深めつつ遊ぶ経験を充実させていきたい。
- 友達とかかわって楽しく遊ぶ幼児の育成の視野から、他学年との交流場面についての研究にも取り組んでいきたいと考える。

(担当指導主事 向井 道子)

Web 検索キーワード

【幼児教育 人間関係 遊び 幼児の思い 活動 つなぐ】

<参考文献>

- ・『幼稚園教育要領』 文部省（平成11年6月）

